

虚子記念文学館投句特選句・令和五年十一月

稲畑廣太郎 選

虚子館の庭よく掃かれ小六月

新潟 安原 葉

聞きたばや河豚に中りし話など

兵庫 惠島祥一朗

朝寒くとも主婦として母として

石川 辰巳葉流

抔げたる桜紅葉や凶工室

兵庫 小杉伸一路

冬に咲くものみな小さくとも健気

兵庫 金田八江子

躑り口誘ふやうに石蓐の花

石川 辰巳昌彦

小春日や先に歩める人のゐて

兵庫 岸川佐江

虚子館へ川を過りて日短

兵庫 藤井啓子

新海苔の封切る朝のゆたかなる

兵庫 二瓶美奈子

新しきブーツをおろす小春かな

兵庫 武田奈々

(青少年)

入選句・令和五年十一月

杖の音かろきふうせんかづらかな	大阪	押見げげげば	記念樹に輝きを足す朝時雨	大阪	田邊育子
冬衣毛玉取りたる姉の眉	三重	水越晴子	ひひらぎはそつと匂へり裏鬼門	奈良	豚々舎休庵
秋雨やテールランプの滲みをり	奈良	堀ノ内和夫	愛読の虚子に私淑や冬ともし	愛知	小野 薫
湯婆を赤子抱くごと運びをり	大阪	櫻淵桜陽子	入選句さくら紅葉の咲きにけり	兵庫	月あんぬ
惜秋の明治村より出す手紙	大阪	多田羅紀子	神木の紙垂揺らす一茶の忌	兵庫	道中義臣
秋の日や水かげろふの映ゆる亭	兵庫	高橋純子	投稿の新聞を待つ露の朝	愛媛	星月彩也華
粧ふ山風のリフトに垣間見る	兵庫	槌橋眞美	初時雨八坂は異国語ばかりなり	兵庫	高市敦之
まとまつて香る苗代菜萁の花	大阪	西尾浩子	大綿のちぎれちぎれて雨模様	兵庫	入谷千恵子
七五三おべべうれしく走りたり	大阪	近藤ゆき	大綿やかすかな風を共にして	兵庫	山岸正子
小六月ひと日満ちゆく心持ち	兵庫	深尾真理子	冬菊の香の立ち上がる白さかな	兵庫	伊藤秀子
決戦の明暗の空神の旅	兵庫	奥田好子	柊の花や寡黙に香を放つ	兵庫	山口弘子
短日の句会約束もう一つ	大阪	林 曜子	海風に冬紅葉鳴る館静か	兵庫	川村ひろみ
実家なき故郷として紅葉濃し	京都	山崎貴子	自死伝ふ花柊の咲く朝に	兵庫	大西美知子
行秋や歩き疲れし影法師	奈良	河村久美子	地に刺さる電柱冬の墓標なり	熊本	貴田雄介
浅漬やすすめ上手な京ことば	兵庫	辻 桂湖	初しぐれ糸屋格子に機之音	兵庫	キートスばんじょうし
閉ざされし鉄扉の向う帰り花	兵庫	池田雅かず	銭湯の朝湯勤労感謝の日	神奈川	平野孤舟
敗荷や虚空に描く幾何模様	大阪	河辺さち子	気を抜いて背骨伸ばさう冬日向	兵庫	岩鼻絹子
青天の果ての果てより今朝の冬	京都	西村やすし	冬日和三代の文字跳ぬる句碑	兵庫	吉村玲子
虚子館の三代句碑に冬立てり	大阪	須知香代子	暮れやすき日や借景の遠比叡	兵庫	太平楽太郎
存問から極楽の歌今朝の冬	大阪	田中令子	大綿に導かれてゆくクルス坂	兵庫	足立朱麻
朴落葉積もる主の亡き館	大阪	上田三枝子	斑点の憂ひ苗代菜萁の花	香川	葛原由起
ときはいま車窓に仰ぐ富士の雪	千葉	山崎寿仁	山茶花や思ひのたけを告げし日の	兵庫	福田光博
落葉見て騒ぐ幼子元気だな	兵庫	宇野悠真	斑鳩の寺に鐘の音冬紅葉	滋賀	近江堇花
六甲の嶺々尖らせて寒さ急	兵庫	玉手のり子	白息の雲は言葉の化身かな	東京	宮村土々
故郷で話はずむ秋の日差し	京都	藤井恒二郎	日だまりにたんぽぽ五つ返り咲	石川	伊東弥太郎
			七五三祝詞に爺と婆の名も	和歌山	中島紀生

石路起立阪神優勝日本一

兵庫

岩水ひとみ

紅葉散り果てし虚空に昼の月

兵庫

田村恵津子

洒落声が社殿に響き神の留守

兵庫

伊集院秀樹

洋館にバツハの調べ冴ゆる笛

神奈川

小林心

落日の色に溶け込む冬紅葉

兵庫

阿曾宏之

西の市木遣りの声も高らかに

埼玉

土井洋子

をちこちの切り火手締めや西の市

神奈川

金子三奈乃

冬鷺のたしかむるごと歩みけり

神奈川

進藤剛至